

題目 尽くさないと捨てられる？

—サポート提供の欠如が対人関係解消に与える影響の日米比較—

氏名 加藤千聡

指導教員 結城雅樹

本研究の目的は、恋愛・友人関係の維持に対するソーシャルサポート提供行動の有効性が、社会の関係流動性によって異なるかどうかを明らかにすることである。恋人や親しい友人にサポートを提供することは、どの社会においても適応的な関係維持の手段であると考えられるが、本研究では対人関係形成機会の多寡を示す関係流動性 (Yuki et al., 2007) の社会差により、その有効性が異なるだろうと考えた。高関係流動性社会では新規関係形成の機会が豊富であり、関係相手を選択する自由度が高いため、相手が自分の元にとどまっている保証がない。こうした社会で相手を繋ぎとめるためには、サポート提供のように積極的な関係維持行動をとる必要がある。一方低関係流動性社会では、関係形成の機会が少なく、相手が自分の元から離れていく可能性は低い。そのため、サポート提供行動の必要性は低いと考えられる。この予測と一貫して、先行研究では関係流動性が高いほどサポート提供行動が多いことが示されている (鬼頭・山田・結城, 2014)。しかし、サポート行動が関係維持に有効であることを確認するためには、サポートの受容者の反応についても検討する必要がある。そこで本研究ではサポート受容者の反応に着目し、高関係流動性社会であるアメリカと低関係流動性社会である日本で、社会人を対象に場面想定法を用いたシナリオ実験を行った。その結果、友人関係においては予測どおり、友人からのサポート提供を得た場合に比べてサポート提供が欠如した場合に、アメリカでも日本でもその友人に対する評価は低下したが、関係解消意図の上昇度はアメリカの方が大きかった。なおアメリカにおいて関係解消意図が大きく上昇するのは、サポートを受けた際の関係解消意図が極端に低いためであった。さらに、友人からの情緒的サポート提供が欠如した場合の関係解消意図の上昇度における日米差は、関係流動性の媒介によって説明された。以上の結果より、アメリカにおけるサポート提供行動は、友人に関係を継続させようと感じさせることができるため、関係維持行動として有効であることが示された。今後は質問項目等の改善により、恋愛関係の維持に対するサポート提供行動の有効性についてもさらに検討していく必要がある。